



# 大阪での出来事 1



実話に基づいたある宗教団  
体と精神障害者の物語

さくらじま ゆうすい

## 第一章～その1～

---

1993年10月、俺はバイトをくびになった。自分の方からやめたのなら納得いくが、いきなりくびになって頭にきた。なにしろ朝、職場に行ってみたらタイムカードがなくなっていた。上司に訊いてみたら他の職を探してくれとのことだった。

俺は無性に頭にきてしょうがなかった。なんとか仕返しできないものかと思った。それで職業安定所でもないが、労働問題を扱う大阪府の部署を見つけ電話で相談してみた。お役所の方は丁寧に対応してもらって、そのくびにした職場へ電話で相談してみるとの回答が返ってきた。

俺はそのころ心理学に興味を持っていた。それほど専門的な本を読んだわけでもなかったが、勝手に自分のことを対人恐怖症だと思い込むようになっていた。それで仕事も何もかもうまくいかないのはその対人恐怖のせいだと決めつけていた。

心理学で中でも興味を持ったのが森田療法という治療法だった。俺は仕事をくびになったことをきっかけに森田療法のカウンセリングをやってもらってはどうかと思うようになった。

俺はタウンページを広げてカウンセリングをやっているところを探した。森田療法をやっているところが二件ほどあった。一件目は電話をかけても話し中だった。二件目、電話に出た。声の感じからすると年配の男性という感じだった。それで早速相談に来てみてはどうかということで、翌日の夕方予約を入れた。

## 第一章～その2～

---

翌日、早速カウンセリングに行ってみた。場所は心齋橋の界隈だった。予約を入れていた時間より少し早めに行くと、別室で誰か二人で会話をしている様子だった。その待合室を見回すと棚には分厚い本が所狭しと並べられていた。古い雑居ビルの一室なので、電燈は点いていても少々薄暗い感じだった。

しばらくすると別室からサラリーマン風の若い男と、五十代ぐらいの白髪交じりの男性が出てきた。話を聴いてみると、どうやら五十代ぐらいの男性の方がカウンセラーらしい。サラリーマン風の男は料金をカウンセラーに手渡していた。

その後、俺はそのカウンセラーに別室の方へ通された。カウンセラーは名前を崎田と名乗った。俺は藤坂徹だとすでに昨夜の電話で名乗っていた。崎田は俺の名前を覚えていた。それにバイトをくびになったことや、俺自身が勝手に対人恐怖症ではないかと疑っていることも覚えていたようだ。

「それで、大阪府の職員の方に相談をされたんですね」

「ええ、そうです」

「それでしたら、話し合いさえうまくいけば、同じ職場へ戻った方がいいんじゃないですか」

いよいよカウンセリングの始まりのようだ。俺はその段階では同じ職場に戻るつもりはなかった。

「いえ、私はできれば他の仕事を探そうと思っているんですけど」

「そうですか。しかし公務員の方にも相談されてるんですから」

「でも、いきなり解雇されたら、月給の三か月分はもらえるようなので」

「そんな三か月分なんてすぐに遣っちゃいますよ。それよりまた雇ってもらえるよう、上司の方とちゃんと話をされた方がいいのでは？」

「そうですか？俺はもう同じ職場はやめといたほうがいいと思うんですけど」

俺はどうも同じ職場に戻ることに乗り気ではなかった。

「そうですか。それならお役所の方ともよく相談して決めてください。それと、今度から毎日日記を書いてここへ持ってきてもらえますか？」

「日記ですか？」

「ええ。そうです。それと、今日は月曜日ですけど、月曜日の方が都合がいいですか？」

「まあ、夕方五時ごろには仕事が終わるんで、夕方以降なら何曜日でも」

「そうですか。それなら月曜日の今の時間が空いてますから、また同じ時間に来てください」

「そうですか。それで料金はいくらぐらいするんですか？」

「藤坂さんは今、失業されたばかりですよ」

「ええ」

「だったら、五千円でいいです」

「一回五千円ですね、わかりました」

その日は大体そんな感じで話は終わった。日記を書いて来いと言われたが、日記など高校生

の頃、メモ帳に日記らしいものを付けていた以来だ。

その雑居ビルを出ると、地下鉄御堂筋線の心齋橋駅に向かった。そこから寄り道などせず俺の部屋に帰ることにした。

## 第一章～その3～

---

大阪府の職員の方から電話がかかってきた。俺をくびにした上司の人と話をしたところ、また同じ職場で働けるように話がついたらしい。わざわざ同じ職場で働けるよう計らってもらったのに、俺は気が進まなかった。それでも、一度上司の人と話し合うよう促された。

翌日、上司と話し合いに行った。俺はもう同じ職場に復帰する話は断るつもりでいた。その上司にそのことを告げると今度は同じ敷地内の別の部署で働いてくれないかという提案をされた。俺はそれを聴いてあまり乗り気ではなかったが、また翌日から働くよう返事をした。

そして、部署が変わって以前は雑誌の仕分け作業などから今度は発送の方に移った。俺は部署は違って同じ会社なので気楽に働くつもりでいた。

ところが初日から問題が起こった。ある一人のパートの女性から遠回しに俺の陰口を言われるようになった。隣の人と会話しているのだが、わざわざ俺にも聞こえるような距離で話をしてくる。俺に直接話しかけてくるわけでもない。俺はできるだけ気にしないようそんな陰口は無視することにした。でも、聞こえてくる話の内容からすると、以前の部署で働いていた人から俺に対し、何か仕返しをするよう言われたらしい。どうやら俺が大阪府のお役人に告げ口したのが気に障ったようだ。

俺はできるだけ無視していたが、それでも陰口は止まない。俺はもうこの職場はやめた方がいいと思うようになった。そして、カウンセリングのある月曜日の夜になった。俺は仕事のことも相談してみることにした。

「つまり、陰口を言われている気がするだけなんですね」

「ええ、直接言われているわけでもないので、確かめようもないんですけど」

「それなら不確実なことは相手にしないことです。事実唯真。この言葉を心得ていてください」

「そうですか？」

「神経症にはよくありがちなことです。確実なことでもないのに大げさにとらえてあたかも事実のように思い込む」

「でも、確実なことでないにしても、私の悪口を言われているとしたら」

「そんなことはどうでもいいことです。あなたは職場へ仕事をしに行ってるのでしょ。そんな不確実なことを気にするより仕事をしてください」

「そうですか。わかりました」

「それに、仕事を休んでもいけないし、辞めてもだめです。遅刻や早退などもしないで、やむを得ない事情がない限りは仕事をしてください。わかりましたか」

「ええ、わかりました」

確かに直接俺を非難してくるわけでもないし、相手は一人だ。何を言われても無視していればそのうちあきらめて陰口を言うのはやめるかもしれない。それにカウンセラーの崎田が言うとおり俺は仕事をしに職場に行っているのであって、わざわざ陰口を聞かされるために通っているわけじゃない。仕事に集中しろというのももっともだ。

それより何もかもうまくいかないのはこの対人恐怖のせいだから、この病気を治すには崎田の

言うことを聴くしかない。プロのカウンセラーなのだから崎田に任せておけば何とかなるだろうと気楽に仕事を続けることにした。

そのうち陰口もやむだろうと気を取り直して臨んだ職場だったが、結果は逆にひどくなっていった。陰口を言う人間が一人二人三人と少しずつ増えていった。やはり直接俺に何か言ってくるわけでもない。間接的に私の耳に届くだけに対処のしようがない。

しかし、これも対人恐怖症が原因だから崎田の言うとおりに、仕事は休まず続けるべきだろう。ここで逃げてはせっかくカウンセリングを受けている意味がなくなってしまう。俺はできるだけ陰口は無視して、仕事に集中することにした。

月曜日の夜が来るたびにカウンセリングで職場のことを日記にも書いているし、相談もするのだが「事実唯真」、不確実なことは相手にしない。これしか言われぬ。俺は対人恐怖症を治すために言うことを聴くしかなかった。

その後も職場での陰口はエスカレートするばかりだった。履歴書などで知ったのか俺の故郷の悪口を言ったり、勝手に職場の女性とのありもしない噂話をしつこいと思うまで聞かされた。それでも俺は不確実なことは相手にしない。仕事は休まず続ける。これを守り続けた。崎田の言うことさえ聴いていれば、そのうち何とかなるだろうと信じていた。

職場の人たちから見れば、何を言われても言い返さずに黙々と仕事を続けるのが、まるで職場の人間を馬鹿にしているか、余程面の皮の厚い人間に思われたのだろう。俺はただ対人恐怖症を治したくてカウンセラーの言うことを守っているだけのことだった。

俺も全く黙っていたわけでもない。時々言い返しはするが、口答えしようものなら倍以上、いや数十倍にして言い返されたといっても過言ではなかった。となると何も言い返さずに黙々と仕事を続けるしかない。月曜日になれば仕事は休むな、やめるな、事実唯真と言われるに決まっている。

しかし、もう俺も限界だと思った。当時の日記を読み返してみればわかる。かなり精神的におかしくなっていた。とにかく支離滅裂なことを書いてある。おれはとうとう崎田の言いつけを破り、仕事を辞めた。その代りカウンセリングだけは続けることにした。一度仕事を辞め、リセットした方が俺の身のためだと決めた。

崎田にそのことを言うと「失敗した。もうだめだ」みたいなことを言われた。それでも仕事を辞めたことで、もうあの地獄からは解放される。そう信じるしかなかった。

## 第二章～その1～

---

俺は崎田から仕事は休まずに続けろという言葉信じ込んでいたので、次の仕事も早く見つけなければならないと決めていた。前の仕事は日払いのバイトで雇用保険など入っていなかった。仕事をしなければ食べていけないという事情もあった。

そして、仕事は見つかった。給与の一部は日払いで受け取れる。住宅のリフォーム関係の仕事だった。アルバイト情報誌にはチラシ配布と書かれてあったが、実際はアポインターと呼ばれる飛び込み営業の仕事だった。飛び込み営業の仕事は初めてだったが、以前宗教活動で布教などをやっていたので、全くできないことはないだろうと、仕事をやってみることにした。

カウンセリングにも相変わらず通っていた。崎田も、まあ仕事が見つかってよかったなとは言っていた。今度の職場は少人数なのでもう陰口をたたかれることもあるまい。もう精神的にも落ち着いて仕事に集中できるのではないかと期待した。

しかし、事態の深刻さは変わっていなかった。今度は通勤の電車の中で周りの人々が俺の陰口を言っているように聞こえてきた。田舎の毎日同じ顔ぶれの通学の高校生しか乗っていない列車ならわかるが、大阪の大勢の人たちが乗っている電車の中で、全く面識のない人たちから後ろ指を指されるような覚えなどない。

被害妄想。一言でいえばそういうことだ。まるで大阪の街の人たちが全員俺のことを知っていて陰口を言っている。そんな妄想が出始めた。

カウンセリングでも周りの人たちがまるで悪口を言っているように聞こえる。そういう相談をするのだが、崎田はまともに相手にせず「君はそんなに有名人か」などと皮肉った言い方をされた。今、思えば崎田というカウンセラーは妄想が出てきていると気づかなかったのだろうか。カウンセラーを職業にしながらそういう基本的なことも知らなかったようだ。

カウンセリングを継続するとともに、真剣に悩み始めた俺は一時期辞めていた宗教法人にも通い始めた。その宗教でも最初は俺のことを久しぶりに帰ってきたなと温かく迎えてくれたような気がしたが、やはり電車の中と変わりはない。そこでも陰口を言われているような気がする。

それでも宗教をやめることはなかった。それにはわけがあった。やはり妄想だ。知らない人たちがあたかもあの宗教をやっている人だ、みたいな言われ方をしているように聞こえてくる。せっかく通うのをやめていたのに、また宗教のことを言われ、通う羽目になってしまった。そうでもしなければその宗教がつぶされてしまうのではないかと思ひ悩むほど妄想にとりつかれていた。

見知らぬ人々からも陰口を言われるが、宗教内でもやはり言われる。板挟みになっていた状態だったが、困ったときの神頼みだった。信心が足りないからこんな目に遭うのだとも思うようにもなっていた。



## 第二章～その2～

---

そんな中でも新しい仕事は何とか続けていた。最初の内は日払いで一部の給与を受け取っているし、契約になかなか結び付かず、こんなやつが仕事できるのかと明らかに疑っている感じだった。しかし、ようやく仕事に慣れてきたせい、俺がアポイントを取った世帯から月に二件ぐらいは契約に結び付くようになった。実際に仕事に使えることがわかると会社の上司も明らかに俺に対する態度も違ってきた。

仕事は何とかできるようになったのはいいが、やはり仕事先でも電車内でも宗教団体内でも俺の陰口を言われているような妄想は消えなかった。

そんな中、宗教の杉谷という俺よりもえらい階級にあたる人間が、隣にいた人に次のようにささやいていた。

「会長先生たちがエルサレムの嘆きの壁の前で記念写真を撮った時に、街中の鐘が一斉に鳴り始めたそうです」

杉谷はさらに興味深い話を続けた。

「そのとき、会長先生は讃美歌を歌い始めたそうです」

俺には讃美歌とか言われてもどんな曲かわからなかった。

「早くこの騒ぎ治まるといいんだがな」

杉谷もやはり俺には直接は話しかけてこない。俺は自分の部屋に帰っても杉谷が言っていた、謎めいた言葉を思い出していた。エルサレムはキリスト教、イスラム教、ユダヤ教の三つの宗教の聖地になっている。確か、救世主が現れると閉ざされていた門が開かれるという預言も残されているようだ。俺は会長が歌っていたという讃美歌は多分この歌ではないかと決めつけ、歌い始めた。

「諸人こぞりて、主は来ますれ。久しく街にいて、主は来ませり、主は来ませり、主は主は来ませり」

救世主と言え、この宗教団体の教祖は自らを救世主だと名乗っていた。俺はもしかしてこの宗教の教祖の生まれ変わりではないかと自分自身を疑い始めた。もしそうでなければ街中が俺のことで騒いでいる理由がわからない。俺は何の証拠もなしにそんなことを思いはじめた。

そのころになると、俺のことなど知るはずもない東京のテレビやラジオでも俺のことを噂しているように妄想がひどくなっていた。と同時にカウンセリングをやめた。もう対人恐怖症を治そうとかそんなことはどうでもよくなっていた。森田療法のカウンセリングは失敗だったと素直に認めなければならなかった。今は、この妄想だか何だかわからない騒ぎを終わらせなければならぬ。

俺はカウンセリングをやめ、宗教にかけてみることにした。そして、仕事も同時に続けた。

## 第二章～その3～

---

俺がその宗教の教祖の生まれ変わりだと思い込んでから、周囲の態度も変わった。中には相変わらず俺のことをけなす人間もいたが、次第に宗教でも職場でもそして電車内など街の中でも人間関係がうまくいき始めた。

しかし、なぜ俺が教祖様だか何だか思っただけで周囲の態度が変わったのかがわからなかった。それに相変わらず俺には直接話しかけることもなく、聞こえてくる範囲で遠回しな言い方をしてくる。「事実唯真」、不確実なことは相手にしないという原則からすると、俺には何の対処もしようがない。俺はただ普段通りの生活を続けるのみだった。

『俺はテレパシーが使える』

とうとうそういうことに気づいてしまった。それも宗教団体内部限定で。どおりで俺が教祖の生まれ変わりとか信じ込んでしまったのをそのまま信者たちが信じ込むはずだ。とにかく誰もいないところでも人の話し声が聞こえてくる。幻聴。統合失調症の症状の一つが現れ始めた時期だった。

人間関係はうまくいき始めたものの、相変わらず俺は教祖だとか、東京のテレビやマスコミの皆さん方まで俺の陰口を言っているような妄想は収まらなかった。

ある日、いつも通り大阪の宗教の支部に行くと、久しぶりに顔を合わす人がいた。

「あれ、藤中さんですよ」

「ええ、藤坂さんでしたよね」

お互いの名前を覚えていた。

「確か、木島で一緒でしたよね」

「ええ、木島のキャンプの時同じスタッフとして」

確か三年ぶりぐらいだろうか。藤中さんは当時高校生だった。俺はまだ大学生だっただろうか。その当時は大学へは行かずに宗教活動にのめり込んでいた。結局その大学は中退してしまった。

キャンプでは俺たちは同じ炊飯のスタッフだった。その炊飯のリーダーが一流会社に勤めるえらそうなやつだったことをいまだに思い出す。

藤中さんも同じ大学生部らしく、どこかの大学か短大に進学したようだ。その時は藤中さんとはほんのあいさつ程度で終わってしまった。

## 第二章～その4～

---

俺はテレパシーが使える。俺は超能力者にでもなった気分だった。その時は事態の深刻さに全く気付いていなかった。最初は宗教団体内部の人たちとテレパシーで遊んでいた。こちらが何か考えると返事が返ってくる。俺は病気に罹っているともわからず、得意げにテレパシーを使って遊んでいた。

住宅のリフォームの仕事の方は何とか続けていた。月二件ぐらいのペースで契約にもっていきける。商品も悪くはない。セラミックを使った新しい住宅用の外壁材だった。ただのペンキの吹付とは違い、防音や断熱効果まで備えている。俺は自分で売り込んでいる商品にも誇りを持っていた。

ところが会社の同僚も様子がおかしいことにある夜気づいてしまった。車で住宅のある現地まで往復するのだが、帰りの車の中ではみんな黙り込んでしまっていた。たまにならいいが、毎晩のように黙り込んでいる。俺はみんな仕事で疲れているのかとか、意外とこの会社の人たちは仲が悪いのかなと思ったりもした。しかし、眠っている人もいないし、普段仕事中等でも普通に会話している。

『もしかして、この人たちもテレパシーが使える』

いきなりそういうことを思いついた。俺は試しに頭の中で、1, 2, 3, 4, ...と無意味に数を数えてみた。

すると職場の同僚たちは関を切ったように大きな声で騒ぎ始めた。どうやら本当のことらしい。俺の考えていることをこの車の中でじっと聴いていた。それも俺が一言も発することもなく。車の中では誰も話しかけてくる人もいないし、考え事でもするしかなかった。それを聞かされていたかもしれない。しかし「事実唯真」、不確実なことは相手にしないということを考えると、俺にはどう対処していいかわからなかった。

その夜は三重県の名張市方面から高速で大阪へ帰る途中だった。

『香芝市のみなさん、こんばんわ!』

などと俺は調子に乗って頭の中だけで叫んだ。そして、車は香芝サービスエリアにたどり着いた。

「そこまで言う奴がいるか」

社長はそんなことを他の同僚としゃべっていた。

大阪へ車で到着すると、今度は電車の中でテレパシー遊びを始めた。目の前に座っていた若い女性に。

『何か、送ってきてみて』

と、頭の中でささやいた。すると彼女は目を閉じてこちらへ何か伝えようとしていた。しかし俺には何も聞こえなかった。

『残念、聞こえない』

俺はテレパシーを身に着けたと得意げになってそんな遊びを続けた。それが、本当の地獄に踏み込む第一歩だとは全く知る由もなかった。

## 大阪での出来事

<http://p.booklog.jp/book/57074>

著者：さくらじまゆうすい

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/dpmpct5160/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/57074>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/57074>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ